

序言

鳩山由紀夫

良くぞ、この本が生まれたものである。

この本の出版に関わったすべての方々の勇氣に感謝を捧げたい。

さらに、この本を手にとってくださった方々の勇氣にも感謝したい。

今まで、日米関係の実相をデイベーに描くことはなんとなくタブー視されてきた。日米関係を描いた出版物は数限りなくあるが、日本の戦後史を「対米従属」vs.「対米自立」という視点から見つめ直した書物はほとんど無かったと言える。孫崎亨氏が『戦後史の正体』の中でその道を拓いた。それは外務・防衛官僚たちが築き上げ、大手メディアたちが無批判的に流してきた「あらずじ」とは大きく異なるものだった。外務・防衛官僚も大手メディアも東西冷戦構造の名残を惜しむのか、世界を見る目がどうしても偏りがちになってしまっている。しかし、日本人はとくに官僚と大手メディアに対する信頼が厚いので、偏った見方に何の違和感も抱かない。と言うよりも、偏っていると思ってもいいのである。

したがって、多くの国民は「対米依存」、「対米従属」は当たり前と思っている。日米安全保障条約によって、万のときにはアメリカが日本を守ってくれるのだから、アメリカの言うことを聞くことは当然であると思っている。日本を守るために米軍基地が存在することも当たり前で、地理的な状況から米軍基地は主として沖繩にあることが必然で、自分の故郷には置いてもらいたくないと考えている。これが平均的日本人の思考である。

毎年アメリカから年次改革要望書が突き付けられると、日本政府は唯々諾々とこの要望の実現を図ってきた。いわゆる郵政民営化もアメリカは自分の国は民営化もしないのに、自国の利益のために日本にはこれを突き付けてきた。小泉内閣はさも郵政民営化が日本のためであるかのように、この実現に力を入れてアメリカを喜ばせた。年次改革要望書は私の政権のときに一時廃止されたが、その後復活したどころか、T P Pにまで尾を振る日本に舞い戻ってしまった。

彼らから眺めると、偏らない発想こそ偏っているように見えるのである。偏らない世界観は官僚から忌み嫌われ、大手メディアからは徹底的に批判される。「対米自立」路線などもつての外ということになる。

それだけに、「対米依存」から、より「対米自立」へと進むことが日本のあるべき姿であるとの思いで書かれた本書は、既得権の勢力やその感化に浴している方々を中心に、多くの批判を受けることになるであろう。その批判を恐れぬ覚悟を持った執筆者たちに敬意を表したい。

それにしても、この国は不思議な国である。

私の願いは日本を真の意味で独立国に育てたいと言うことである。

この本の根底に流れる共通の願望は、T P P参加交渉に見られるように、何でもアメリカの顔色を見ながら政策判断をしなければならぬ日本ではなく、この国の生きざまは尊厳を持って日本人自身が決められる独立国日本を創り上げたい、ということであると信じる。そしてそれは決して突飛な考えではなく、至極当然の主張である。

ところが、余りにも長くアメリカにお世話になっているからであろうか、この国ではアメリカに依存して生きるものが日本人の遺伝子に組み込まれてしまっていて、「対米依存」が「保守」の思想の中核となってしまう。なぜアメリカに守られている日本をそのままにしておいて「保守」なのか分らない。昔、「巨人、大鵬、卵焼き」という言葉が流行った。大鵬は鬼籍に入られたが、どうも「巨人、大鵬、卵焼き、そして自民党、さらにはアメリカ

カ」が代表的な日本人を形成しているかの如くである。この国の「保守」には、日本をもつと尊敬を持った自立した国にしようという気概は見えない。そして、その気概を持った人物たちは官僚たちから嫌われ、大手メディアから批判を受け、「変わり者」、さらには「間違つた思想の持ち主」扱いされるのである。

いや、私は何もアメリカを批判するつもりはない。嫌米でも反米でもない。そのようなスタンスを取るべきではないと思つている。実際、スタンフォード大学に留学して多くのことを学んだし、アメリカ人は好きである。ただ、だからと言つて、何をするにもアメリカの意向を付度しななければならないというのは、独立国ではないのである。そして、その根底に、日米安保で日本の安全がアメリカによつて守られているから仕方がないと言つてであれば、今すぐには無理であつても、例え五〇年、一〇〇年かかつて、日本の安全は日本人で守れる国にしようではないかと思つるのである。必要なとき、即ち、緊急事態が発生したときのみアメリカの助けを借りるべきであるという常時駐留なき安全保障という考え方がその中間段階として生まれる。さらに直近の問題としては、普天間の飛行場の移設先をできれば国外に、最低でも沖縄県外にすべきではないかとの発想が生まれるのである。「最低でも県外」を総理時代に実現できなかったことは誠に慙愧に堪えない。しかし、発想が間違つていたとは今でも思つていない。

領土問題にしても、「対米従属」派と「対米自立」派とは重点の置き方が異なつてゐる。「対米従属」派は、領土問題があるからアメリカの存在は重要で、抑止力を維持し、むしろ高めるためにも沖縄の米軍基地は必要であるとの論になる。一方、「対米自立」派の主張は、領土問題がこじれて戦闘状態になつたときに、アメリカが日本を支援するとは限らない、それどころか、領土問題が今日まで解決しないできているのも、アメリカの存在が影響しているとの論を取る。どちらがより正解に近いかは読者にこの本を読んでいただくことにしたが、領土問題の解決のためにも大いに資することにならう。

私はいわゆるジャパンハンドラーたちの手に、いつまでも日米関係を委ねるべきではないと考へる。否、私はジャパンハンドラーたちがアメリカの普遍的な声ではないと確信している。そして、良心的な多くのアメリカの人々にも、アジアを含めて世界の人々にも、日本人は尊敬を持つて生きていけると、尊敬の念を持たれる日が来るようになってもらいたいと願つてゐる。そして、本書がその日を実現させるために大いに役立つと信じる。